

## 中国空軍早期警戒管制機部隊の現況

漢和防務評論 20120221

**KDR 無錫特電**：近年来、中国空軍が情報化戦争及び空地一体化作戦能力を強化するとの方針に基き優先的に拡充してきた中国空軍航空兵第 26 特種師団は、機密度の最も高い部隊である。現在、同師団は、KJ-200、KJ-2000 型早期警戒管制機のほか、少なくとも 6 種類の“高新技术”電子戦機及び殲偵-6F 型戦術偵察機を含む 11 種類の機種を装備している。同師団は、対外的には 94778 部隊と呼称され、配備基地は、上海（司令部）、南京（大教場）、蘇州、及び無錫（朔放）の各飛行場へと拡大した。そのうち蘇州飛行場は、運用施設を地下化した。



KJ-200 ↑



KJ-2000 ↑

しかしながら同師団は、成立以来問題が山積している。第一は、秘密漏えい事件である。同師団のニュースソースによると、「同師団は、外国情報機関の重点的な情報収集対象であるが、反逆者が出た。これは中国軍内では“羅万民事件”と称され、反逆者は同師団の若干の秘密を敵の特務機関に売り渡した」という。この事件は、全軍に通報された。

このほか、装備機が全て新型機なので、航空機の品質問題が同師団を長年悩ませてきた。KDR はかつて、KJ-200 型“高新技術”早期警戒機について、騒音が大きく戦闘（機上）作業に影響を与えていると報道した。また KJ-2000 型機については、長期にわたって電磁妨害に悩まされてきた。これらの問題は、実践と模索の中でのみ解決できるものである。もともと計画していた早期警戒機連隊の拡大は、“IL-76 輸送機購入事件”（注：IL-76/78 型機の生産に係わるロシア国内問題と中国がコストアップを拒否したことによる輸出中断）によって放棄せざるを得なくなり、中国空軍は、事実上、現在開発中の”大型国産輸送機”の誕生を待つしか方法がなくなった。

問題はこれだけでなく、航空兵第 26 師団に装備されたばかりの殲偵-8F 型シリーズの偵察機に技術的問題が続出し、偵察任務に大きな影響を与えている。近年来、台湾海峡上空に頻繁に出現した殲偵-8F は、同師団の所属機である。この機体は、”神秘的”な戦術偵察機である。瀋陽航空機会社の飛行場ではこの機体は目撃されていない。試験飛行は夜間に行われ、秘密の程度は、J-11、J-16、J-15 シリーズの戦闘機よりも高い。

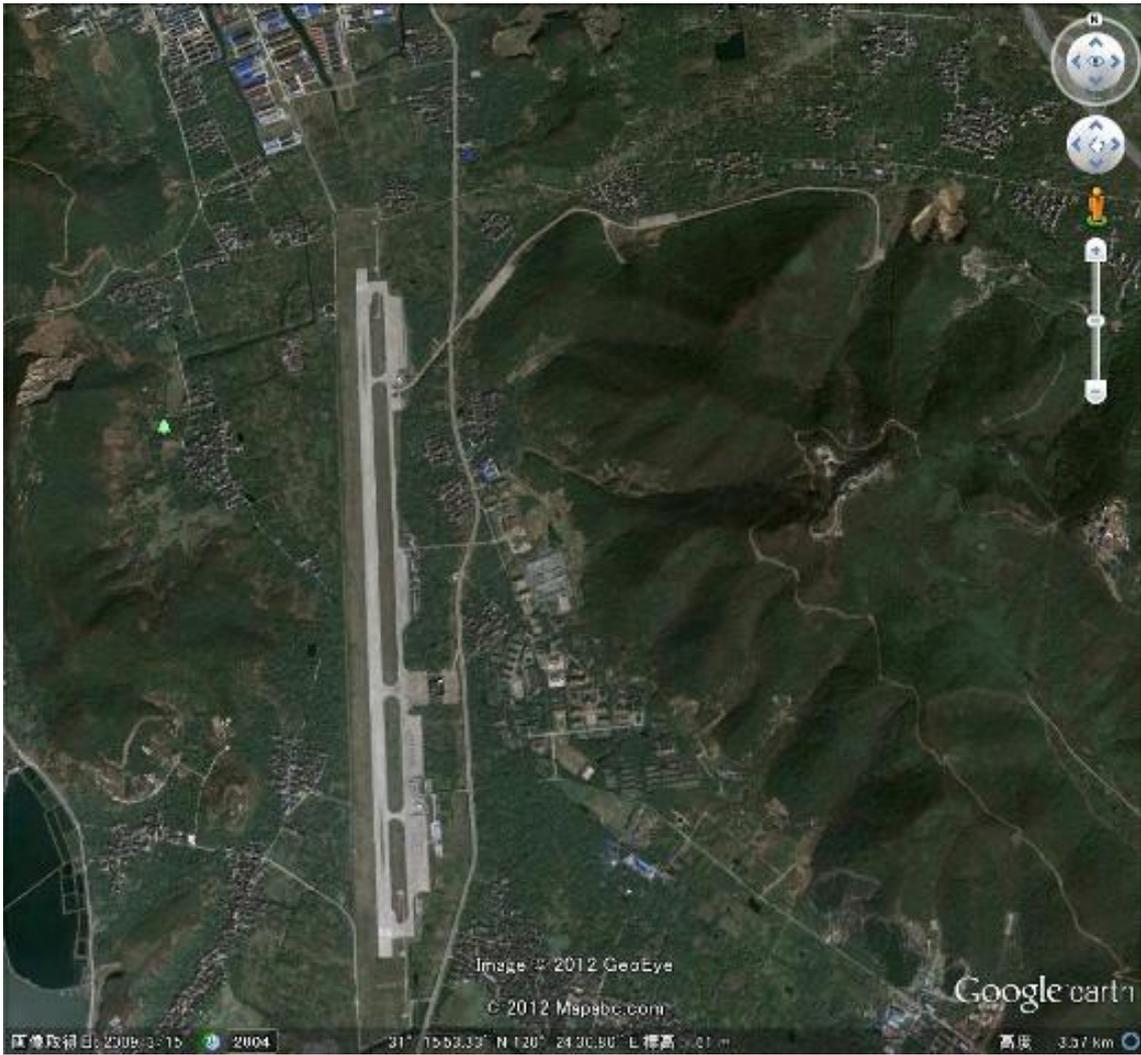


殲偵-8F ↑ (胴体前方下部のレドームに注意)

しかし、2010年5月27日、偵察第3連隊の連隊長 YE JIANG (人名) の操縦する殲偵-8F が、飛行中に右エンジン停止し危うく墜落するところだった。その後全機飛行停止になった。過去には類似事件が多数発生している。この機体は、国産の”崑崙”型エンジンを搭載している。これらのことから、かつて珠海エアショーで展示されたこのエンジンには品質上欠陥があると思われる。KDR は、同連隊の殲偵-8F が通常蘇州飛行場から発進することが分かった。同飛行場は、2010年7月の衛星写真によると、安価な殲偵-8F が駐機している。不思議なことに、16機のJ-6型戦闘機が駐機している。J-6戦闘機は2009年に全部退役したはずである。したがって蘇州飛行場に駐機しているJ-6は、JZ-6型(無人偵察機)ではあるまいか? 無錫(朔放)飛行場は、殲偵-8Fの機動用飛行場であるが、主としてKJ-200及びKJ2000が配備されている。殲偵-8Fの胴体下部には巨大なレドームがある。内部は電子情報収集装置及び撮影装置である可能性が極めて高い。このほか機体後部上方には巨大な刀状のアンテナがある。エンジンに重大な欠陥があるため、航空兵第26師団のパイロットは殲偵-8Fを嫌っている。南京(大教場)飛行場は、少なくとも10機の”高新技术”Y-8型特種航空機が配備されている。KJ-2000は同飛行場を時々使用する。



無錫飛行場 ↑



蘇州飛行場 ↑



南京（大教場）飛行場 ↑

衆知の通り、KJ-200 は、2006 年の試験飛行において大事故（6.3 事件）を起こした。一流の航空技術者を含む 40 名の専門家が犠牲となった。その善後処理

が現在も続いている。この事故は、航空兵 26 師にとって痛恨の出来事であった。災いはこれだけに留まらず、2010 年 4 月 27 日、早期警戒機連隊の KJ-200 にまたしても重大な人的事故が発生し危うく大事故になるところだった。ニュースソースは、次のように述べた。「如何なる国の空軍でも、知識水準の高低に関わらず迷信を信ずることがある。航空兵 26 師の KJ-200 は、軍人の内面世界に消し去ることのできない傷を残した。政治教育では、ややもすれば” 国家の重要財産は人命よりも重要” と教えられる。パイロット、特に航空機の整備員、地上勤務員の受ける心理的圧力は極めて大きい」と。2011 年、搜索救難連隊の Z-8K ヘリコプタの機上整備士 LI ZHONGMIN (人名) は、飲酒時、殺虫剤を酒と間違えて飲み急死し、同師団に大きな反響を引起した。6.3 事件で救助が間に合わなかった教訓から、航空兵 26 師は搜索救難部隊を設立し搜索救難機に Z-8K 型ヘリを装備した。



Z-8 型ヘリコプター↑

同師団のさらに未解決の問題は、統卒上の問題である。同師団は、空軍中のエリート部隊であり、知識水準は全空軍中の最高水準にあり、1980 年代、1990 年代出生の大学卒が多い。これらの軍人は、単独での思考能力が高く、個人主義的色彩が強い。また同師団は、発展した大都市周辺に所在し、統卒が極めて難しいという。彼らは、コンピューターネットワーク、最新型携帯電話の普及率が高く、1990 年以降生まれの軍人は、” 国家の革命記念日には関心がないが、西側のバレンタインデー、クリスマス、ハロウィンに関心がある” という。これらのことから、中国軍は、統卒上 2 つの問題があると見られる。すなわち” 空軍のハイテク技術者は、高技術、高学識の人材を必要とするが、一方西側資産階級の影響は拒否したい” と。航空兵第 26 師団は、その典型的な部隊である。

以上

参照写真 : GOOGLE EARTH

日本周辺国の軍事兵器 :

<http://wiki.livedoor.jp/namacha2/d/KJ-2000%C1%E1%B4%FC%B7%D9%B2%FC%B4%C9%C0%A9%B5%A1%A1%CA%B6%F5%B7%D92000%A1%CB>